株式会社 山幸
〒 646-0027 和歌山県田辺市朝日ケ丘 17 番 14-101号
TEL. 0739-24-3045
https://www.yamako-kk.co.jp/

Company history

Since 1971-202

お客様と ともに歩んで…

私たちはこれまで、
たくさんのお客様と出会い、
たくさんのお家（うち）づくりをお手伝いさせていただきました。

お客様と直接顔を合わせながら
お客様の幸せを一番に考え
新築やリフォームといった「お家づくり」を
大事にしていくことが、
弊社の理念であり、
弊社スタッフが最も喜びにしているところでもあります。

お家づくりの中で出会えた、
たくさんのお客様との絆を大切する、
そんな会社でありたいと考えております。

会社の沿 革と歴史

昭和 46 年 6 月	1971 年	▶ 榎本宇内が山幸住宅産業株式会社を設立
昭和 50 年 5 月	1975 年	▶ 鉄骨・鉄筋コンクリート構造建築分野に進出
昭和 52 年 3 月	1977 年	▶ 一級建築士事務所登録
昭和 55 年 5 月	1980 年	▶ 株式会社山幸に名称変更
昭和 57 年 3 月	1982 年	▶ 大型宅地造成工事 166 区画大戸台分譲地完成
平成 2 年 4 月	1990 年	▶ リゾートホテル東急ハーヴェストプロジェクト着工
平成 10 年 5 月	1998 年	▶ ローマ字表記 yamako を採用
平成 21 年 6 月	2009 年	▶ 田辺市本宮町熊野本宮館新築工事完成
平成 27 年	2015 年	▶ 田辺市立会津小学校新築工事完成
平成 29 年	2017 年	▶ 田辺市立新庄小学校新築工事完成
令和元年	2019 年	▶ 田辺市立大坊小学校新築工事完成
令和 3 年	2021 年	▶ 第 5 回きのくに建築賞最優秀賞受賞 （田辺聖公会マリア礼拝堂新築工事）
令和 4 年	2022 年	▶ 株式会社カナセ様　本社工場着工

創業当時の林業会社の貯木場

−創業の背景−

私たち山幸の歴史は、1971 年に遡ります。
榎本宇内の夢と情熱によって始まったこの旅路は、
地域に根差し、人々の生活に寄り添いながら
進んでまいりました。
初期の困難や挑戦を乗り越えながら、
山幸は地域の経済発展に貢献し、
着実な成長を遂げてまいりました。

社員と協力業者（2009年撮影）

−持続可能な成長のために−

私たち山幸は、これからも変化する社会環境に柔軟に対応し、
持続可能な成長を目指してまいります。
お客様の期待に応えるために、
品質の向上と技術の革新に取り組むとともに、
社会的な責任を果たす企業として、
地域社会への貢献を続けていきます。

「山幸のあゆみ」

1971年→2023年

インタビュアー
宮本 倫好
×
榎本 宇内
（株式会社 山幸 創業者）

宮本 倫好（みやもと のりよし）
ジャーナリスト　コラムニスト
昭和５年生まれ
産経新聞社ロンドン特派員・ニューヨーク支局長などを経て文教大学名誉教授・スピルハレット大学（ルーマニア）名誉客員教授など

榎本 宇内（えのもと うだい）
株式会社　山幸　創業者
昭和８年生まれ
慶應義塾大学卒業後　産経新聞社を経て
昭和 46 年に現在の株式会社山幸を起業

宮本　この度は『株式会社山幸の歩み』と題し創立から現在までの色々なお話を伺っていこうかと思ってます。

榎本　宜しくお願いします。
設立は昭和46年ですね。株式会社山幸住宅産業という社名でスタートしました。
家業である林業会社の経営に携わっていましたが、当時このままではいずれ林業は厳しい斜陽産業になるだろう。何か手を打たなければと考えていたところ、その当時、一世帯一住宅はまだまだ充足されていない時代でしたから、木材を利用して住宅を供給してみようと考えたのがスタートでした。

宮本　なるほど。
今考えると、高度経済成長期の後に少しずつマイホームが現実のものになってくるタイミングでしたね。

榎本　そうなんです。折に銀行も住宅向けローンに力をいれ始めておりましたし住宅金融公庫（国の融資）なども主流になりつつあるタイミングでした。
銀行手続きからお手伝いしていき、当時お客様から信頼を得られたかと思います。

宮本　その当時では画期的だったんですね

榎本　自分の家が持てるんだっていうお客様の喜ぶ声が嬉しかったですね。宅地開発もこのころスタートしました。
当地紀南エリアは海があってすぐ山が迫っていて平地が少ない地域です。いい土地を造ってやろうと思って色々チャレンジしましたね。

宮本　1975年ごろから現在に至るまで一般の住宅用宅地を700区画あまり提供されてきたと聞いておりますが…。

榎本　大きな分譲地では山を一つ切り崩して 100 区画以上のも手がけましたね、それ以外でも10区画前後のものは田辺市、上富田町、白浜町で様々な場所でさせて頂きました。
土地がないと始まらない時代でしたし、市や町が住宅用地を提供してくれるのを待っていると追いつきませんからね。
この頃私の大学の同窓で親しかった佐々木信也くん（スポーツキャスター）に TV コマーシャルに出演頂いてテレビ和歌山で放映いたしました。
これが功を奏して山幸の名前は一気に県下に知れ渡りました。

宮本　佐々木信也さんですか?あの元プロ野球選手でその後プロ野球ニュースのキャスターなどされていた??大学時代の友人でいらっしゃったんですね。

榎本　CM 出演を依頼した際には『お前の会社つぶれないか??』『顔に泥ぬらないよう頑張るよ』と冗談を言い合って快諾してもらった記憶があります。

Yamako history
Since 1971-2023

完成した大戸台団地（右上が工業高、左が田高）

学園団地展望

大戸台団地完成
10億かけ 4万平方メートル150区画

第二弟万に次ぐ大型団地「大戸台団地」が完成した。
私山学（榎本本内社長、資本金二千万円）が田辺市芳子坂の大戸地区の山林約万平方メ（一万二千坪）を約十億円かけ一年半がかりで造成したもの。
同団地は文相園に隣した南向きの台地で、同社が販売した住宅地で知られる学園団地に隣接、オークワ田辺店にも徒歩五分のところ。また、団地に接する大戸線が都市計画街路として、市が近く幅員十六メ道路に整備が決定してい
る。団地内には小公園や防火水槽を設置。
私山学（榎本本内社長）は田辺市芳子坂の大戸地区の山林約万平方メ（一万二千坪）を約十億円かけ一年半がかりで造成したもの。
同団地は文相園に隣した南向きの台地で、同社が販売した住宅地で知られる学園団地に隣接、オークワ田辺店にも徒歩五分のところ。また、団地に接する大戸線が都市計画街路として、市が近く幅員十六メ道路に整備が決定している。団地内には小公園や防火水槽を設置。
百五十区画の宅地のうち約二百五十区画の面積は約百五十平方メ（四十五坪）住居は十三万五千七百五十円台（三・三平方メ（一坪）三十一三十二万円）分譲は一千九、三十の面目現地で。

紀伊民報
（昭和 57 年 5 月 25 日）

宮本　ほー。なるほど。そういうこともある中、山幸の住宅がどんどん売れていったわけですね?

榎本　そうそう一足飛びにはいきませんでしたが徐々に伸びていきましたね。木造住宅だけでなく鉄骨他の建築物も手がけられるよう技術陣もレベルアップしていきました。1980 年に社名を山幸住宅産業から総合建設の『山幸』に改称しました。
この頃には総合建設業、一級建築士事務所また宅地建物取引業いわゆる不動産業もそれぞれ確立して行きました。住宅産業だけじゃなくなってこの際スパッと山幸でいこうと。
同時に地元田辺市の建設入札指名ランクは A（市の呼称はイ）和歌山県の建設指名ランクも A になることもでき、いくつかの公共建築物も携わっていくようになりました。

宮本　印象に残っている事業などありますか?

榎本　たくさんありますが、1989 年に東急不動産とジョイントベンチャーで行った田辺市新庄町湾岸エリアでのホテル・リゾートマンション建設への参画は記憶に残っています。
私自身田辺市新庄町の出身ですし新庄の発展、和歌山県紀南活性化のために不退転の交渉を東急不動産関係者と行いリゾートホテルの立地から関わって行ったんで印象深いです。

紀州新報 6月20日(火曜日) 平成元年(1989) 第12858号

東急 田辺市に進出

東跡之浦にリゾートマンションなど

第一期 来春着工 200億円を投入

紀州新報
(平成元年6月20日)

紀伊

7月3日にオープン

田辺市の熊野本宮館

紀伊民報
(平成21年5月23日)

宮本　歴史に残る建物を建てられたんですね。

榎本　それともう一つ印象深いのは田辺市と上富田町の境界にそれらを結ぶ国道42号線がありまして、そこに古くて狭いトンネル（田鶴トンネル）が存在していました。
そのトンネルは現在のバスや大型トラックが交互に通行しないといけないようなもので、当時上富田町の発展の妨げとなっていました。
当時、通学途中の高校生が大きな交通事故で被害にあったりだとかもありまして、無論国道の問題ですし、上富田町の問題。
国や地方公共団体の仕事と捉えていましたがある日、私のところに上富田町の当時の町長がやってきました。

宮本　興味深くなってきました。

榎本　町長の話によると、トンネルなのでその上部は山林でそのトンネルを改良するにはその山を除却してオープンカットの道路を国には希望しているとのことで、国は内諾しているとのこと。
しかしその条件は地権者の交渉や地元同意は上富田町がすべて取りまとめできればというオプション付きのものでした。
私は不動産開発をてがけておりましたのでこの山は大変な所有権の混乱したエリアで多数の所有権が重複した混乱地であることを知っていました。今思えばなぜ私のところに助役がやってきたのかはわかりませんが…その時私は町長の『上富田町100年の計。この難題に力をかしてほしい』という言葉につい、意気に感じてしまったのです。それが1991年ごろだったと思います。

危険 工事早くして!

田鶴トンネル 大型車すれ違いできず

ヒヤリ自転車スレスレ

紀伊民報
(平成9年5月30日)

宮本　どのようにその難題に取り組まれたのですか?

榎本　重複した所有権の地権者と交渉して所有権を買い上げていく作業をスタートしました。
地元におられる方から大阪　名古屋　各地に散らばった所有者と交渉し重複した所有権を買い戻していきました。これには大変な時間と労力また巨費を投入しました。

宮本　何年ぐらいかかったのですか

榎本　足掛け11年かかりました 2005 年に国がオープンカット工事に着手するまで紆余曲折。大変な作業でしたね。
事業の採算などというレベルではなくなってましたね。せめてものその事業で切り出した土を利用して当時の上富田町長などに協力を得て造成地を造り工業団地を造りました。

宮本　転んでもただでは起きなかったわけですね。

榎本　その間の社員の気持ちを考えると決して胸を張れるようなことではないです。
が、結果として、トンネルの問題は解消されその一翼を担うことができたことは私としては臥薪嘗胆の結果と捉えています。

不況に挑戦する経営者たち

自分の家を建てるつもりで

「山申」代表 榎本 宇内さん(65歳)

紀伊民報
(平成11年7月25日)

宮本　本来、公共が行う仕事をやってしまったんですか??

榎本　いえいえ、最初の露払いですよ笑。しかし所有権の整理はこの事業のネックだったわけですから、この国道42号線の田辺市と上富田町との境のトンネルをオープンカットできるようになった事業に民間企業として責任の一端を果たせたんではないかなと個人的には思っています。

宮本　素晴らしい功績ですね。

榎本　しかし、ここでまさに地獄で仏。私は人生において苦境に直面した時、いつも神様に助けてもらって来たなと感じるのですが… 。
副産物として造成した工業団地約 33000㎡の土地が株式会社カナセ様の（故）金谷照男会長の本社工場移転構想の用地としてお眼鏡にかなったのです。

宮本　ほー。その土地がですか??

榎本　株式会社カナセ様の（故）金谷照男会長と私は個人的にも親しい間柄で、公私にわたり大変懇意にさせて頂いておりまして、以前より会社設立100周年に際して本社および新工場を建てる用地を探してほしいとの依頼を承っていました。

宮本　そんなタイミングってあるんですね??

榎本　私も改めてそう思います。別々のプロジェクトで動いていましたし、国道の残土の工事は4年に渡って行われていたのもあって、点と点と、頭の中で別物になっていました。

宮本　その点がその時一本の線につながったわけですね。

榎本　まったく、これが先にも述べた『おみちびき』なのかなーと今も思っていますし（故）金谷照男会長や現金谷清道社長には本当に手を合わせる思いです。
また株式会社カナセ様には、その後の本社工場新築事業にも現在携わらせていただいております。感謝の気持ちでいっぱいです。

宮本　なるほどそういういきさつがあったんですね。まさに紆余曲折というところですねー。
50年余り今まで事業の内容を聞いてきましたが、これは思い出に残っているなというエピソードは何かありますか?

榎本　うーん、やっぱり楽しかったのは社員や協力業者といった旅行かなー。
協力業者は『山幸会』という下請けの協力会社の会で今でも60社あまりの会があります。

昭和四十年七月廿日第三種郵便物認可

田辺市内

60区画の宅地造成

完成と同時に完売

景気低迷下でも

秘けつは〝ミツバチ〟商法

紀伊民報
（平成 12 年 2 月 1 日）

国内はもちろん、香港・マカオ、グアム、ハワイや、アメリカのラスベガス、オーストラリアなどに社員とその会 100 人を超えるメンバーで旅に行ったことは楽しかった思い出ですね。

宮本　そんなに色々と行かれたのですか?

榎本　マカオでは社員がカジノでとんでもない大当たり出しちゃって、週刊誌に報道されるようなハプニングもありましたね。
ひと口に50年でといっても本当に色々なことがありました。

宮本　何かお話を聞いていて一冊の物語を読み終えたような大変ボリュームがあるというか、平易な言葉ですがドラマチックなお話でした。
先ほどお話にも少し出ましたが株式会社カナセ様の本社工場新築工事についてもう少しお話聞かせてもらっていいですか?

榎本　用地は先ほどお話にも出ましたちょうど田辺市と上富田町との境目に存在します。
高速道路の上富田インターをおりて数百メートルのところになります。
そちらにこの度本社工場新築工事を現在着手させて頂いております。
記事にもありますが、延床面積 8700㎡の本社棟、工場棟、倉庫棟など計8棟の建物です。2024 年 5 月に稼働の予定で現在新築工事を進めております。
こちらの工事に関しては株式会社カナセ　故金谷照男前会長にご指名頂き、カナセ 100 周年の一大事業として今は亡き会長の思いを拝受して私の使命として謹んで取り組ませていただいております。
ここに至るまで株式会社カナセの金谷清道社長はじめ関係各位には改めて御礼申し上げます。

宮本　まもなく完成ですね。

現在進めている、株式会社カナセ様の本社工場新築工事

榎本　現在富士山でいううと７合目８合目付近ですかね。
何とか完成まで無事にやり遂げて喜んでいただきたいなと思っております。

宮本　最後に今後の株式会社山幸の進むべきところについてお考えをお聞かせください。

榎本　わが社は衣食住の住の産業です。
なくてはならないものであると。時代は変われど基本は変わらず。
お客様の心を我が心とし、一つ一つ積み重ねていくことだと思います。
その信頼が実績となり地域の皆さんに支えられ、そしてさらに地域を支えていく企業にならなければならないと思っています。

宮本　わかりました。大変長時間ありがとうございました。

※令和５年６月15日時点の内容です。

新工場のイメージ図＝カナセ提供

新工場24年に稼働

上富田で「カナセ」

上富田町朝来のボタンやアクリルシート製造会社「カナセ」（金谷清道社長）は17日、2024年春に朝来地区内の大内谷区に新工場を完成させ、本社を移転する見通しを明らかにした。
金谷社長（66）が同日、田辺市内で記者会見を開き、本社移転に伴う新工場の建設計画について説明した。
土地の面積は約3万3千平方㍍。一部3階建てのアクリル工場や平屋の倉庫、2階建ての本社事務所など計8棟（延べ床面積8700平方㍍）を建設する。11月に着工し、24年5月の本格稼働を目指す。
カナセは、もともと田辺市稲成町に本社を置き、上富田町朝来内にボタン事業を担う荒堀工場、アクリル事業を担う富田川工場があった。21年7月からは荒堀工場を仮本社としていた。新工場の完成に伴い、仮本社と老朽化した富田川工場の機能を新工場に移転し、富田川工場は閉鎖・売却する予定という。
新工場のアクリル生産能力は年間約2千㌧、最大約3300㌧で、富田川工場とほぼ同規模。これまでは厚さが最大50㍉までだったが、60～100㍉のアクリル板も生産できるようになる。
当初の計画では、同社の創業100年に当たる19年に大内谷地区に新工場を建設し、本社を移転するとしていた。だが、資材価格の高騰により見積額が想定を大きく上回ったため計画を延期。さらに、工業用水の利用を巡って町との主張に食い違いが生じ計画が遅れていた。
その後、町と調停が成立。町が新工場の操業開始後に奨励金5千万円を私うなどの措置を取り、カナセが約3億円かけて整備する地下水の送水設備の費用を事実上分担する形で決着した。
金谷社長は会見で「ようやくここまでたどり着いたという思い。企業の社会的責任として、雇用の維持や、取引先も含めて職を守ること、納税は非常に大事だと考えている。上富田でこれからも事業を続けていくという意思表示でもある」と語った。
カナセは1919年、上富田町朝来で創業。34年にナットボタン、56年にユリア樹脂ボタン、49年にポリエステル樹脂ボタン、59年にアクリルシートの製造を開始した。アクリルシートの国内シェアは約2割を占める。従業員は約190人。

紀伊民報
（2022 年 6 月 18 日）

創造と挑戦、次なる50年へのスタート

スタッフ紹介

人を大事にし、人との繋がりを大切にしている会社

私は、他工務店にて現場監督として従事しておりましたが、人を通じて山幸に入社しました。

実際に入社して感じたこととしては、人を大事にし、人との繋がりを大切にしている会社であると思います。

私自身も実際は、人との繋がりが一番大切にしており、沢山の方々に協力、応援されていることにより多くの家づくりに携わることができていると感謝しております。

これからも人との繋がりを大切にし、喜んでもらえるような家づくりをスタッフと共にしていきたいと思います。

株式会社　山幸
営業部　玉井 雅則

山幸の不動産や建築に対するノウハウが魅力。

入社３年目の廣瀬拓真です。

会社に入ったきっかけは、山幸の不動産や建築に対するノウハウに魅力を感じたからです。

そして何よりも色々な人と人をつながりを大切にする社風には入社して改めて見習うべきところであると思っています。

家づくりを通じて様々な人々に出会い、語り合い、そして一つのものを創っていく喜びは私の人生においてとても意味のあるものだと感じて日々の仕事に取り組んでいます。

まだまだ経験が少ない中、色々な先輩にもご指導いただきながらですが、この株式会社山幸で、私のモットーである明るく楽しい人生を送っていきたいと思っています。

株式会社　山幸
営業部　廣瀬 拓真

培った技術、経験を活かし現場監督として貢献。

私は鉄工所で工場溶接・現場建て方作業に従事し、その後土木作業員として、橋台・護岸・道路工事を担いました。その培った技術、経験を少しでも活かし現場監督として貢献出来ればと、山幸に入社いたしました。

しかし建物を築くという責任は、容易なことではなく日々悩み大変努力のいることでした。

お客様と協力業者様、地域の皆様との間にまず信頼関係を築く大切さを諸先輩方から学びました。これまで支えてくださった多くの方々に心より感謝しております。

誠実なものづくりは、お客様の生活に彩りが生まれます。

常に考え多種多様な視点で、信頼にお応え出来るようこれからも一層精進してまいります。

株式会社　山幸
建設部　山本 剛史

信頼をコツコツ積み重ねる次の 50 年。

まだ右も左も分からない二十歳になり立ての若造が縁あって山幸に入社して約 20 年。

あまりに何も知らな過ぎて入社して数日で辞めようとも思いましたが沢山の方々の叱咤激励のお陰で人生の約半分を山幸で務める事ができました。

これからも今までと変わりなく信頼をコツコツ積み重ねる事が次の 50 年、更なる 50 年へと繋がると思います。

自分自身も更に信頼を得られるよう日々邁進し、山幸の礎の一部になることが社会人としての身構えをご教示頂いた山幸への、そして地域の皆様への恩返しになるのかなと考えています。

株式会社　山幸
建設部　山本 一歩

山幸への憧れと高品質な住宅を手掛けている姿勢に深く感銘。

私は大学卒業後、タカラスタンダード（株）に入社し、和歌山支店に配属されました。

入社してすぐの業務としては、今のようにITが進んでいない時代につき、手作業で工務店別の売上・販売機種等の整理をしておりました。（主に紀南エリア担当）

大阪で生まれ育った私が目にしたのが、山幸の現場数の多さ、納品機種のグレードの高さであり、山幸の勢いや高品質な住宅を手掛けていると深く感銘したことを今でも思い出します。

それからすぐに、同田辺営業所に配属となり、ご縁を頂き山幸の担当となりました。更に痛感したことは、家づくりにかける想いとレベルの高さでした。

家のことだけでなく、施主様の周囲にある様々な問題点等も含めて、親身になり対応している姿を見て、いつしか山幸への憧れを抱いたことが後に弊社に入社したきっかけであったと思います。

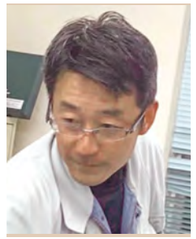
社外の身及びよそ者の私に対する心温かい対応、公私共に様々なことを教えて頂き、気が付けば、山幸に入社することを決意していました。山幸は、家づくりだけでなく、街づくりをする会社であるという点も最大の魅力の一つでもありました。

山幸が52年間に手掛けてきた宅地造成工事は多大なる功績であり、現在の主となる田辺市を形成してきたと言っても過言ではないと自負しております。私は創業者である榎本宇内氏を中心に諸先輩方が築き上げていた歴史にはじない様、更なる飛躍に向け社員及び関係業者、これから出会う新たな仲間達と共に、田辺市中心に紀南エリアの街づくりをおこなっていきたい夢があります。しかし昨今は、空き家等も増えてきており、闇雲に新規宅地造成工事をすればいいという時代ではありません。

空き家を如何に活用するか、既存建物をより良いものにリノベーションすることができるかも、今後の大きな課題であると感じております。

山幸で培った知識、技術を現代風にアレンジさせて個々の力を最大限に発揮し、社員一丸となり、お客様のみならず紀南エリアの方々に喜んで頂ける、多くの皆様に支持して頂ける企業であり続けられるように今後も精進していきたいと思います。

株式会社　山幸
常務取締役　永田 直之



山幸の成り立ちを知り、歴史を学び、自社が行ってきた事業が紀南のまちづくりに貢献。

地元高校を卒業後、都会での生活に憧れを抱き、もう田辺に戻ることは無いかな…とも感じながら気づけば 10 年間、大阪での生活が続いていました。
そんな折、山幸の現場担当者として働くことのご縁をいただき、郷里の田辺に戻ることとなりました。

前職も同じ建設業界であった為、特に違和感なく働ける環境ではありましたが、入社直後まず私が仰せつかった業務は３日間連続の草刈りでした。梅雨入り後の雨天にもかかわらず汗まみれになりながら「なんでやねん!」と愚痴ったことも今となれば良い思い出です。

これまでの会社の成り立ちをよく理解していなかった私は、草刈りの際「この土地は山幸が開発を行った稲成団地だよ」と先輩に教えていただくまで、山幸が宅地開発から建築工事まで一貫して提供する業者であること知らなかったのです。

なんとも無知で頼りない状況の中でしたが、お客様、協力業者様、会社の仲間に支えられながら業務に携わっていく間に山幸の成り立ちを知り、歴史を学び、自社が行ってきた事業が紀南のまちづくりに貢献し大きな役割を果たしていることを痛感していくようになりました。

52 年間の長い時間の中で、私が実感として知りえる時間は社歴の半分にも届きません。
これから先、世界の中の日本、日本の中の地方、取り巻く環境は決して楽観的に捉えることは難しく、常に変化革新が求められます。時には困難を目の当たりにし、隘路に立ちすくむこともあるでしょう。
その折には、創業者並びに諸先輩方に残していただいた社歴の中の知恵・努力・喜びに思いをはせ、ご縁をいただいた皆様、ふるさとに恩返しができるように努めることが私の役目であると感じています。

株式会社　山幸
専務取締役　熊代 高也

株式会社　山幸
代表取締役　**杉若 貴之**

創業50余年の記念すべき事業となりこれからの『山幸プライド』元年に

弊社の歩みをご覧頂き誠にありがとうございます。

弊社は昭和46年（1971年）に創業者榎本宇内が設立し以来現在に至るまで52年間という長い間お客様のご愛顧、様々な方々のご尽力また先人の努力により今日まで幾多の困難を乗り越えて参りました。

この度弊社の「歩み」を改めて振り返り創業者また様々な方々への感謝と御礼そして畏敬の念を抱かざるを得ません。
昭和、平成、令和へと時代が激変していくなか、幾多の苦境、隔靴掻痒また皆様に頂いた喜びにより磨き上げられた船体は決して巨大な船ではありませんが、堂々とこれからも大海原を航海できるものと疑いもしません。
我々後進としては、乗組員一人ひとりが改めて認識を深め、自分自身を高めそしてチームワークを磨きこの船のクルーとしてこの先の100年企業に向けた航海を、気持ち新たに邁進していかなければなりません。温故知新という言葉がありますように我々社員はこの「歩み」を血肉として創業者、先人の考えを規範に社業に邁進し、また隘路に際しての考え方に大きな気付きを与えてくれる事と思います。
浅学菲才な私ではございますが社員と一丸となり斯様な志でこの先の弊社の航海を行って参りたいと考えております。何卒ご指導ご鞭撻また叱咤激励のほど重ねてお願い申し上げます。

さてこの度は株式会社カナセ様本社工場新築工事を施工させて頂き感謝の極みであります。株式会社カナセ様とは前会長（故）金谷照男様と弊社前社長（現相談役）榎本宇内との長年のお付き合いの中で結ばれた強い友情を大きな土台とし、（株）カナセの金谷清道社長の地元企業の寵愛また地域産業活性化の大号令のもと実現したものであります。
この度無事に完成の運びとなり恭悦の極みであり、ここに携わった全ての関係業者を代表して、あらためて御礼申し上げます。
弊社といたしましては工場用地の検討の折から考えますと13年の年月を経て完成する超大型プロジェクトです。これまで至らぬ事も多々あったかと思いますが全力で努めて参りました。
株式会社カナセ様の社長をはじめ、役員スタッフの皆様に温かいご指導を頂き今日を迎えることができました。誠にありがとうございます。我々はこの大事業をお手伝いさせて頂いたことを株式会社山幸の誇りとさせて頂きこれからも株式会社カナセの金谷社長の地域の産業の発展を願うの心に感謝しながら、我々としてもそのご意向に従い地域発展のために存在する企業になる決意を新たに致しました。
弊社としては創業50余年の記念すべき事業となりこれからの弊社の『山幸プライド』元年になった事はこの先後進が振り返った時に議論の余地もないことと確信致します。
最大級の感謝と御礼をここに表します。ありがとうございました。

末筆になりましたが、この歩みを編纂するにつき発案から編集に至るまでひとかたならぬご尽力を賜りました宮本倫好先生に重ねて深謝を申し上げます。

ごあいさつ

田辺商工会議所 会頭
株式会社カナセ
代表取締役社長
金谷 清道 様

株式会社山幸創業者である榎本宇内様と弊社先代の金谷照男は非常に昵懇にさせて頂いておりました。

そのご縁のお蔭で弊社は当初上富田町生馬にて建設途中で頓挫したゴルフ場跡地に新工場を建設すべく、株式会社山幸様に用地買収の仲介をお願いしましたが、残念ながらその時は実現しませんでした。

しかし、どうしてもアクリル樹脂工場の生産能力増強を叶えたかった弊社は縁あって長野県上伊那郡南箕輪村に現長野工場を建設することを決め、その際に建築工事は株式会社山幸様に担当して頂きました。ただ、長野工場で生産能力は充実しましたが、現状富田工場の老朽化の問題は解決せず、何らかの手を打たねばならないことは明らかでした。

そうした中、田鶴のトンネルのオープンカット工事で発生した残土を埋め立てた工業団地を紹介され、当時の小出上富田町長からも工業用水のことは心配しなくても構わないという言質を得られたため、大内谷に新工場を建設する決断を下しました。

今回の建築は規模が大きいことから、株式会社山幸様と株式会社田中組様との JV にお任せすることになり、現在工事が予定通り順調に進行しています。

弊社の基盤事業であるアクリル樹脂板工場の2件をともに株式会社山幸様にお請け頂いたことは非常に有難いことであり、長年の信頼と実績に裏打ちされた株式会社山幸様であるからこそ弊社も安心してお任せしている次第です。

弊社新工場建設が株式会社山幸様の歴史の中でエポックメイキングな構築物にならんことを大いに期待すると同時に、創業百周年を目指してさらなる飛躍を遂げられることを願って止みません。

ごあいさつ

参議院議員
参議院自由民主党幹事長
世耕 弘成 様

このたびは、株式会社山幸様の設立 52 周年、誠におめでとうございます。

また、記念事業の一環として、御社の記念社史が発行されますことを心よりお慶び申し上げますとともに、この企画に携わられた関係者の皆様方に対し、深く敬意を表します。

高度成長期の激動の時代、昭和 46 年に株式会社山幸住宅産業を設立され、創業者榎本宇内様はじめ社員各位の想いとご努力により、地元田辺市の発展に多大なる貢献をされました。

オイルショックやバブル景気など経済が大きく変化する中、地域社会の安全を図るとともに、安心して生活できる環境づくりにも大きな役割を果たされてきたことと存じます。

ここに至るまで、決して平坦ではない道のりを拝察し、深甚なる感謝を申し上げます。

この 52 年の間に建築業界も機械化が進み、品質や安全面への配慮の必要性も格段と高まっております。南海トラフ地震の発生による深刻な被害が懸念されている中、御社におかれましては、これまで培ってこられた豊かな知識と経験を生かし、卓越された技術力と先進性をこれからも遺憾なく発揮され、サスティナブル（持続可能）企業として末永く業界を牽引していかれるものと確信しております。今後も「安全で安心して暮らせるまちづくり」の実現に向け、より一層のご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

結びになりますが、株式会社山幸様が地元を代表する企業として、益々ご発展されますこと、また、今まで支えてこられた先人の方々のご苦労とご努力を、永く後世に伝えられる記念社史となりますようお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

榎本宇内さんとの縁（えにし）

宮本　倫好

人間の縁というものは面白い。人生はその縁の連続だが、様々な好悪模様が交錯するなかで、これこそ「特記すべき一生の宝物」というにふさわしい縁がある。私にとってその好例に、榎本宇内さんとの交友を上げたい。

敗戦後８年たって、まだ焼け跡が辺り一帯に残る大阪駅前の梅田の一角に、白亜の近代的大ビルが完成した。後年東京タワーも作った実業家・前田久吉の生んだ産経新聞本社で、９階建ての白亜の大殿堂は、北大阪一帯を睥睨（へいげい）する威容だった。

翌年私はこの新聞社を受験したが、志願者は全国から殺到した。私は他の新聞社を幾つも受け、中にはトップ入社成績のところもあったが、隔絶してカッコいいこの新聞への第一志望は揺るがなかった。

前田社長は東京進出を急ぎ、経営に無理を生じて、財界のリーダー水野茂夫にバトンタッチした。水野は業界初の海外留学制度を発足させるなど、人材育成に力を入れた。私はこの制度の受益者で、後年世界中で仕事をする幸運に恵まれた。

一方の榎本さんは私の３年後に大阪本社に入社した。やはり激烈な入社試験を突破した栄光のポストだ。しかも慶応大学卒の大阪本社入社は珍しかったので、入社時からその将来は嘱目された。新人研修を兼ねて和歌山支局に配属されたあと、大阪本社経済部記者となった。

「宮本さんの田辺高校の後輩です」と自己紹介されたとき、「聞いていたよ。経済部長が大変喜んでいたな。頑張って君も将来は経済部長になれよ。産経は何といっても大阪では経済専門紙の側面も強く、読者も非常に多いからな」と肩をたたいて激励した。「はい、田辺の後輩としても、精いっぱい頑張ります」と、彼は目を輝かせながら素直に応じた。

田辺の後輩といえば、市内にあった旧映画館「常盤（ときわ）座」の御曹司・志波良輔さんもさらに何年か後輩だ。彼は同じ時期、やはり大阪本社編集局で速記を担当していた。

常盤座について少し脱線すると、終戦から半年余り過ぎたある日、旧制田辺中学の校庭で大相撲の地方巡業があった。その前日、常盤座の２階畳席に座った私は、横に天下の大横綱･双葉山がいるのに気がついた。思わず「こんにちは」と挨拶すると、「中学生か。しっかり勉強しなさいよ」といわれた。

授業をさぼっての映画だったか記憶にないが、大横綱のそばに座り、激励された中学生は私一人だろう。とっさに「サインを」と頼む才覚がなかったので、この自慢話にも証拠がないのが残念だ。後年、その常盤座が駐車場に代わり、その経営者になったのが志波良輔さん。

田辺高校卒の３人もが同じ時期、同じ新聞社の編集局で同じ釜の飯を食ったというのは、例がないのではないか。この「田辺３人組」の交友は現在も継続中だ。

榎本さんと私の関係に戻ると、彼の新人記者時代、小型飛行機墜落事故にたまたま遭遇し、その原稿を社会部にいた私が電話で聞き取ってまとめた、という貴重な思い出もある。

さて、その榎本さんにある日、突然彼の退職話が持ち上がった。家業の関係で、どうしても田辺に帰り、親が創業した製材業を継がなければならなくなったという。彼にしてみれば、一生の職業として選んだジャーナリストを早々に棒に振るのだから、その悩みも深刻だったに違いない。私は「折角の洋々たる前途を」と心から惜しんだが、彼の決意はもう固かった。「そうか、男がそこまで決めたのなら、それも運命だ。後はベストを尽くして成功し、いつの日にか、このボクに晴れ姿を見せてくれ」といって、送り出した。

その後も彼との交友は、様々な形で続いた。帰郷の度に顔を合わせ、盃もよく共にした。私は海外駐在も各地で長く、直接の交友は途絶えることもあったが、帰国、帰郷の度にできるだけ顔を合わせるように努めたものだ。その度に私の身辺の変化にはよく気を配ってくれたが、自身の変化については、自らの言及は少なかった。しかし、周辺からは「彼もよくやっているよ」という風の便りは、折に触れて私の耳に届いていた。

今回、このパンフレットの私との対談で、独立後の彼の苦労や、新しい挑戦の数々を知らされ、感動した。転職の時もそうだったが、「あなたは本当に、生涯挑戦の人だな」と、改めて痛感した。

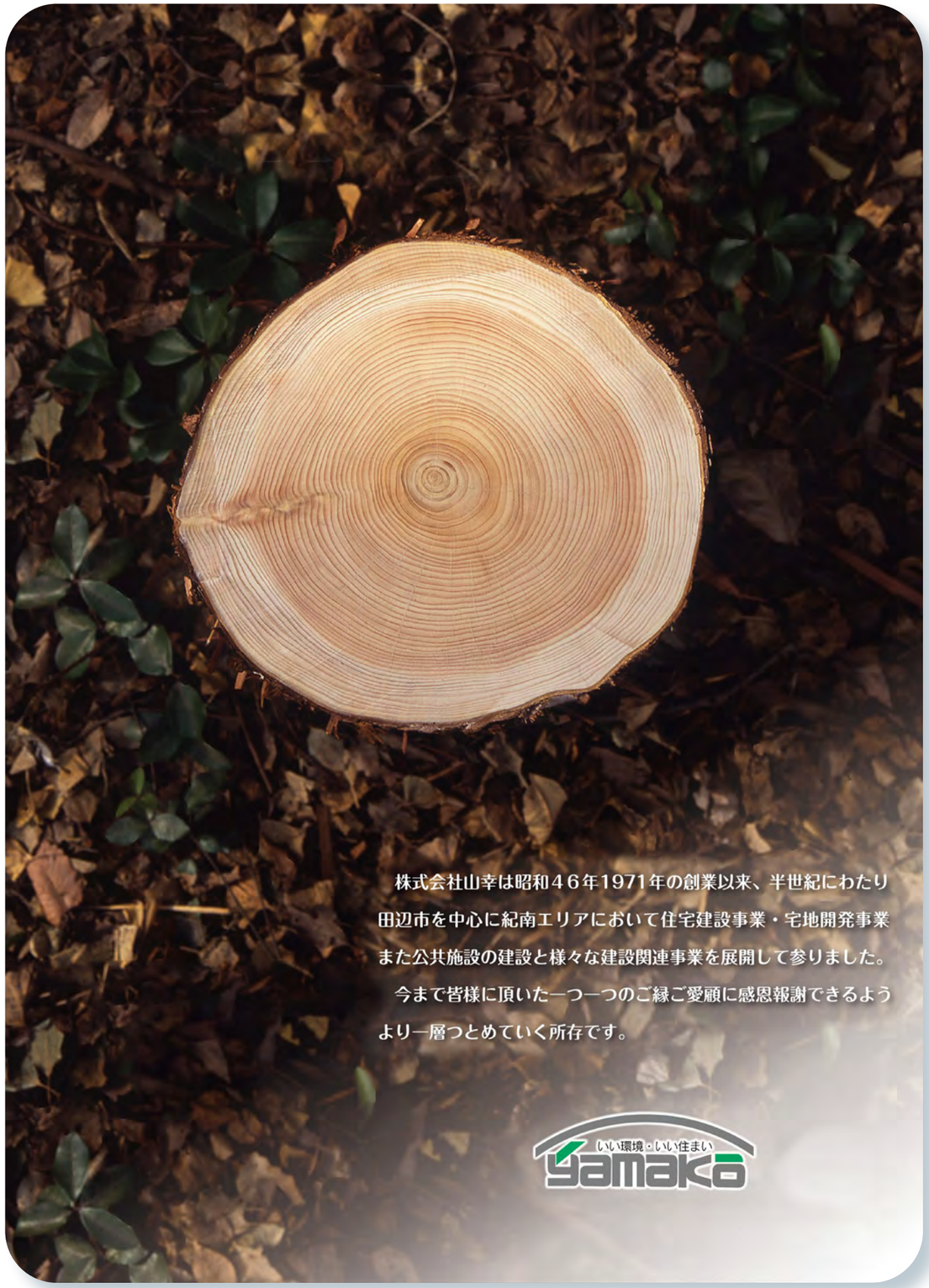
今度の山幸による株式会社カナセの新社屋建設は、私には画期的な事業に思える。紀南ばかりでなく、日本各地で不振に悩む地方の振興に、大きな刺激を与えるはずだ。実はカナセの金谷清道社長一族とも、私は長い付き合いがあるのを誇りにしている。それだけに今回、榎本さんの山幸と、カナセが手を組むことに、満足感、幸福感がいっぱいだ。

日本は世界でも有数の「長寿企業大国」である。江戸時代から存続する企業が３千社以上あるという。これは欧米先進諸国にも見られない現象だ。その背景には「会社は創業者が誠心誠意作ったものであり、継続が至上だ」という精神が非常に強い、というのが最大の要因だ。

さらに、「社員は家族の一員だから、幸せな人生を送ってもらうのが会社の責任だ」という使命感が経営者にみなぎっている。この基本理念はカナセ　山幸も同じで、ここまで成長するには私の知る限りでも、経営者と従業員の強靭な一体感があったし、社員の愛社精神も、私は常に痛感させられた。この精神は当然、会社の更なる成長によって強化されるから、今度の新規事業は、この伝統に大きなバネになるだろう。

先年、高野山を訪れたら、「企業墓」が多いのに、正直なところ驚いた。日本の大企業の多くが、独自の墓地を持ち、社員に開放しているのだ。「そこまでやるか」と感嘆したが、「会社は一生涯、そして死後まで忘れずに社員を大切にする」という強い意思の表明だと知った。といっても、「田辺の高山寺に山幸の墓地を」という短絡的な発想で紹介したのではない。

今度の新規事業は、山幸が創業以来はぐくみ、現在の経営陣が魂を込めて育成してきた「全社の一体感」を、飛躍的に向上させるこの上ない機会だ。今まさにチャンスの女神が全社員に満面の笑顔で微笑みかけている、と改めていいたいのだ。



株式会社山幸は昭和４６年1971年の創業以来、半世紀にわたり
田辺市を中心に紀南エリアにおいて住宅建設事業・宅地開発事業
また公共施設の建設と様々な建設関連事業を展開して参りました。
今まで皆様に頂いた一つ一つのご縁ご愛顧に感恩報謝できるよう
より一層つとめていく所存です。

いい環境・いい住まい
yamako